

佐野誠子『怪を志す——六朝志怪の誕生と展開』名古屋大学出版会

中国の魏晋南朝（六朝）時代、志怪と呼ばれる書物が書かれるようになった。本書の書名は、この志怪の語を訓読して『怪を志す』とした。「志」は「誌」字に通じ、記録を意味する。志怪とは、もともとは怪異の記録であった。本書はその六朝時代における志怪がどのように誕生し、また、仏教と邂逅したことで、どのような展開を持ったのかということ論じたものである。

本書は二部構成となっており、第Ⅰ部は、歴史記録として書かれた志怪という着目から、歴史書と志怪の関係について論じた。

第一章では、まず、六朝時代までの歴史書の編纂の状況をまとめ、書く人も種類も増加した背景をたどった。中でも六朝時代には雑伝と呼ばれるテーマ別の人物伝記集が多数書かれた。志怪も書籍目録である『隋書』経籍志では、史部雑伝類に分類されていた。志怪と他の雑伝書とを比較することで、志怪は、怪異をテーマとした人物伝記集と位置づけられることを明らかにした。さらに志怪の性格を明確にするため、正史にある災異の記録である五行志との比較を行い、国家にまつわる災異しか記録されなかった五行志にたいし、人物伝でもある志怪は、ある人物の怪異の遭遇の記録であり、これまでは記録に値すると考えられていないものが記録されたのだと論じた。章の最後では、五行志や志怪の妖異の情報はどのようにして得られたのかについて考察し、口頭伝達と書物からの引用との混合であることを指摘した。

第二章では、五行志と関わりが一定程度ある志怪以前の書と志怪を取り上げて、志怪的な怪異が、懐疑を持って見られていたのが、干宝『搜神記』では、五行志の災異と結びつけられることで、記録としての正当性を獲得し、その後は、ありふれた怪異の一要素となっていくさまを記述した。

第三章では、これまでの歴史書にはあまり記録されてこなかった、志怪ならではの怪異の話題として、廟神と幽鬼をとりあげた。志怪は、王朝の歴史という桎梏を離れ、生活空間に存在する、誰にでも起こりうる怪異を積極的に記録した。

第Ⅱ部においては、第Ⅰ部では触れることのできなかった志怪と宗教、特に仏教との関係について論じた。仏教は、インドで誕生し、中国に本格的に伝わったのは後漢時代末期、魏晋南北朝時代から本格的に広まった。つまり、志怪の誕生期とほぼ同じ頃のことである。仏教自体は、志怪の誕生には直接影響を及ぼしていない。しかし、特に南朝宋以降、仏教は志怪の内容に大きな影響を与えるものになり、一般の志怪の中に仏教の話題が出てくるのみならず、もっぱら仏教の題材のみを扱う「仏教志怪」も編まれた。

第四章では、仏教志怪誕生の背景を記述するために、志怪における僧侶の描かれ方の変遷を記述した。はじめは、非仏教徒が不可思議な異人としての僧侶を記録していたが、その後、仏教徒達は自らも積極的に不可思議な能力を示す僧侶のことをするようになっていった。

第五章では、仏教志怪である『宣驗記』『冥祥記』『観世音応驗記』の違いについて論じ、特に応驗譚のみに特化した『観世音応驗記』について、前両書とのテキストの関係、また、それ以外の部分において、文献・口頭による応驗の情報を西方・北朝由来のものまで集大成した点が、他の志怪と異なることを明らかにした。

第六章では、仏教志怪の中でも特に盛んに説かれた冥界遊行の素材を扱った。仏教徒は、従来からあった中国での冥界訪問譚に、仏教の審判の要素を取り入れた。そこには、仏教とは関らない六朝志怪には従来存在しなかった意図的な改変が見て取れることを指摘した。

終章は「中国「小説」史への吸収」と題し、簡略ながらも志怪・仏教志怪の唐代における変質、唐代伝奇への変化、そして、本来は史として書かれていた志怪が、はじめから本質では史を志向していなかった唐代伝奇と同じく、宋代以降は「小きき説」として歴史書の片隅からも完全に追い出されたことを記述した。

本書は、筆者の六朝志怪に関する研究の総まとめであり、日本語著作としては、初の六朝志怪に関する専著でもある。